少女よ、起きなさい。

奨励	三木 メイ [みき・めい]
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター専任講師 日本聖公会司祭
研究テーマ	キリスト教の実践神学（女性学、人間関係、牧会）

会堂長の一人でヤイロという名の人が来て、イエスを見ると足もとにひれ伏して、しきりに願った。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」そこで、イエスはヤイロと一緒に外へ出て行かれた。

(マルコによる福音書 5章22—24節)

イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」イエスはその話をそばで聞いて、「恐れることはない。ただ信じなさい」と会堂長に言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、家の中に入り、人々に言われた。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。」人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。そして、子供の手を取って、「タリタ、クム」と言われた。これは、「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」という意味である。少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。イエスはこのことをだれにも知らせないようにと厳しく命じ、また、食べ物や衣服を少女に与えるようにと言われた。

(マルコによる福音書 5章35—43節)

苦しかったら、私の背中を見なさい

「なでしこジャパン」（女子サッカー日本代表）が、女子ワールドカップで優勝しました。その日から今日で9日、毎日どこかのテレビ番組で、なでしこジャパンのことが報道されています。マスコミの注目度は、準々決勝、準決勝と勝ち進むにつれて、急激に高くなっていきました。サッカー好きでも何でも私にも、彼女たちが優勝すれば何かが変わるのではないかと、という予感をもたせるような勢いがありました。少なくとも「大和撫子」という言葉のイメージが変わるかもしれない、と私は期待をもって見ていました。私の持っている国語辞典の「やまとなでしこ」の項目には、植物のナデシコの別名、という説明の他に、「か弱いけれど、凛々しいところが有る」という意味で、日本女性の美称」と書いてあります。どうして「か弱い」という形容詞がついているのか気になります。なでしこジャパンには「か弱い」という言葉は、全く当てはまらないのではないのでしょうか。繰り返しやってくる不利な状況に対しても、常に冷静さを失わず、チームメンバー同士の気持ちをつなげて、最後の最後まで決して希望を失わないで、自分たちを信じて戦う。その精神力とチームワークは、決勝相手の強豪・アメリカチームにも勝るほどに強固なものだった、それが証明された優勝だったといえるだろうと私は思います。

日本では、女子サッカーは長い間注目されず、財政的にも恵まれない環境で、主力選手の多くが働きながら練習しているのだそうです。一方、男子サッカーにはたくさんのプロ選手がいて、スポンサーもつき、コマーシャルに起用される者もあり、マスコミにも大きく取り上げられます。要するに、一般的に日本社会では、男子サッカーに比べて、女子サッカーそのものに対して何か期待や希望をもってみられるということが、これまではほとんどなかったわけです。今回のワールドカップの試合で、澤穂希選手を含め、なでしこジャパンのメンバーが、これだけ勝つことにこだわって執念を燃やした背景には、このような女子サッカー界の状況を変えなくては、という思いが強かったようです。日本に女子の代表チームができてから今年で30年ですが、先輩の選手たちの、今よりもっと恵まれない環境で頑張っている様子が撮影された練習中のビデオを、今の選手たちが練習の合間に見ていたということが、ある番組で紹介されていました。澤穂希選手自身は、17年前に15歳で日本代表チームの一人に選ばれていたそうで、彼女が12歳のころを知る人は、そのころからすでに非常に優れたサッカーの技・センスを身につけていた、といえます。そういう意味では、若いころから注目されていた選手ですけれど、それでも女子サッカーが社会から注目されるほどの結果をなかなか出せない、ということに苦しんできました。彼女は若い選手たちに、「苦しかったら私の背中を見なさい」と言っていたそうです。これはなかなか言えない言葉です。自分のすべてをこたえんサッカーに賭けて、苦しくても走り抜いてきたからこそ言えるのだらうと思います。それだけ努力してきた、そのうえで、彼女はこう言っています。「サッカーの神様がここまで連れてきてくれたのだから、思いっきり楽しもう、と思いました」と。私は、ああなるほど、それでプレッシャーに押し潰されずにプレーできたのだな、とわかりました。

あきらめずに希望をもって生きる

女子サッカーのお話をしましたが、聖書とどのようなつながりがあるのか、と思っておられる方もあるだろうと思います。実は、今日の聖書の箇所は、二人の女性にイエス様が奇跡的な癒しの業をなさった二つの物語が、サンドイッチのようにになっている不思議な箇所です。新共同訳聖書では、「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」と題名がつけられています。この二つの物語には、ある共通するメッセージが込められているように私は思います。登場するのは、一人は12歳の少女で、もう一人は12年間出血が止まらない病気に苦しんできた女性です。状況は全然違うのです。しかし、二人の女性を取り巻く周りの民衆たちから、この女性（または少女）は、もうだめだ、もう生き生きと喜びをもって生きていくことはできない、幸福にもなれない、存在価値はない、とみなされていた点では共通しているのです。イエスの服に触れた女性は体から血の流出がある病でしたので、当時のユダヤの律法で「汚れたもの」と見なされていたのです。彼女は周りの人びとから「汚れた女」というレッテルを貼られて、差別されていたのだらうと思われまふ。それにもかかわらず、彼女は諦めなかった。多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、財産も使い果たしてしまっただけで、誰からも、この人の人生には幸福は訪れないと思われていたに違いないのですが、彼女は諦めなかった。そして、「この人なら」とイエスの服に自分からそっと手を伸ばしたのです。それは、法的にはイエスを汚す行為だったのですが、それに対してイエスは「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言います。あなたはそれでいいのだ、苦しいことがあっても諦めずに希望をもって生きるのだよ、という意味の言葉をその女性にかけて、祝福したのです。

恐れることはない、ただ信じなさい

ヤイロの娘のほうは、少し気をつけて読む必要があります。娘がどうして死にそうなのか、その理由は書かれていないのでわかりません。とにかく、父のヤイロが、必死になってイエスに頼んでいます。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう」と。ヤイロは、諦めていないのです。娘が回復して生きることにはまだ望みを持っています。ところが、人びとがやってきて、「お嬢さんは亡くなりました。もう先生に来ていただく必要はなくなりました」と言うのです。もうヤイロの娘はおしまいだ、イエスが来たって意味がないよ、ということですが、しかし、イエスは言います。「恐れることはない。ただ信じなさい」と。会堂長の家に着くと、人びとが大声で泣き騒いでいるので、イエスが「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ」と言うと、人びとはイエスをあざ笑った、と聖書には書いてあります。想像してみてください。本当にこのヤイロの娘のことを心配している人、その死を悼んで悲しんでいる人たちがいたら、ここでイエスをあざ笑ったりするでしょうか。おそらくしないでしょう。この周りにいた人びとは、この娘はもうだめだ、と決めつけてそのことを確認したくて集まった人びとなのかもしれません。しかも、イエスのこともバカにして全く信頼しようとしていません。イエスはそういう人びとを家の外に追い出します。そして、本当に心から娘の回復を願っている両親と、イエスを神の子と信じる3人の弟子だけを連れて、娘のところに行って、言葉をかけます。「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」と。彼女は12歳だった、と書いてありますが、当時この年齢は、子どもと大人の境目となる年齢です。実際に彼女がどのような状態だったのかはわかりませんが、たとえば何らかのいじめや虐待にあって心の傷を受け、今でいう引きこもりや摂食障害、うつ状態、リストカットをするような状態になって、周りの人びとがこの子はもうだめだ、と思ってしまうようなことがあったのかもしれない。

人間は、周りの人びとが映しだす自己像に敏感かつ無意識に影響を受けてしまいます。「お前は駄目な人間なのだ」という目でずっと見られていると、そうか自分は駄目な人間なのだ、自分は存在価値のない人間なのだ、というふうにならぬまにか内面化してしまう傾向があります。逆に、「あなたは大丈夫。みんなあなたのことを大切に思っていますよ」と周りの人々から言われると元気になるものです。

どうしてなでしこジャパンの話をしたか、少し分かってきたでしょうか。「女子サッカーは男女同権の国ほど強い」と言われていたそうです。だから、一番強いのはアメリカかというわけですが。そういう逆境にありながらも、「自分たちのサッカーをやって勝つ」という信念をもってあの快挙をやり遂げたことには、大いに拍手を贈りたいと思います。きっとたくさんの女の子たちが、「なでしこジャパンの選手みたいになりたい」という希望をもったのだらうと思います。彼女たちが恐れず、あきらめずに信念をもって戦い続けたことが、多くの人に感動と希望を与えたことは、確かな事実だといえるでしょう。

世界各地の女性たちの祈りと活動

今日（こんにち）日本においても、かなり男女平等の社会になってきている、と感じている人も多いとは思いますが、ジェンダーをめぐるさまざまな課題が未だ多くあり、女性が女性として生きにくい現状があります。それを変えていこうという勢いは、日本よりもアメリカやカナダの方がとても強い、ということは認めざるを得ないと思います。

私は2011年2月下旬から、ニューヨークで行われた国連女性の地位委員会と、同時開催のNGOの協議会やイベントに参加してきました。今年で55回目の開催を迎えています。世界各国の政府代表団と、女性問題にかかわって活動している援助団体のメンバーが集まってきていました。今年のテーマは、「女性および少女が教育・訓練や科学技術に平等にアクセスでき、一定水準の正規の仕事に就けるように推進していく」ということです。そして継続的に取り上げているテーマとして「女性および少女に対する暴力や差別をいかに防止していくか」という課題が挙げられています。多くのNGOは、高校生、または中学生くらいの少女たちを国連の会場に連れてきて、彼女たち自身にプレゼンテーションさせていました。アフリカやアジア各国からも参加してきています。ある会場ではアメリカの教会の女性団体が、ザンビアの女の子を招いて、現地の女の子の実生活の一例をビデオ録画で報告させていました。ビデオで紹介されていた女の子は、十代で結婚させられ、妊娠・出産して間もなく離婚されて家を追い出されました。彼女は乳飲み子を抱えながらも仕事がなく、隣の家の水をペットボトルに入れてそれを市場で売り歩いてわずかな収入を得るしかありません。彼女は画面を通して訴えていました。「私は教育を受けて、きちんと仕事をして自立したい。でも、その手立てが全くないのです」と。そして、プレゼンテーション担当の少女は、このような状況を変えていくために、国の政府にどうしてほしいか、国連にどうしてほしいか、国際的な援助団体にどうしてほしいか、ということをととても明確に訴えていました。このような場を用いて、少女たちをエンパワメントして、あきらめないで自ら希望の道を見いだすことができるようにという祈りをもって、彼女たちを支え、現状を変えていく努力がさまざまな女性たちによってされているのを、私は目の当たりにしました。

生きるうえで体験する苦しみ・悲しみというのは、さまざまにあります。それを乗り越えようとする人びとが聖書に登場してきます。神様は、それらの人々を顧みて、生きる力を与え、そして豊かな恵みと祝福を与えてくださる、というメッセージが、たくさんのお話として聖書の中に込められています。そういう働きは神様だけに任せておいていい、ということではないと思います。私たち自身が神様の業を知っているならば、私たちに何ができるかということが、神様によって導かれていくと思います。特に東日本大震災によって被災された方々が、大きな苦しみのなかで生活し、そして将来に明るい希望を見いだせない状況が続いています。特に、子どもたちがどのような心の傷をもっているのだろうか、そしてまた、そのことを表現できないで生活しているのではないかとということが非常に気にかかっております。しかし、遠く離れたところで、一体、自分に何ができるのか、まだまだみえてこないのですが、神様がその方々に慰めと励ましを与えてくださって、そして私たちにできることを教えてください、そのときを待ちたいと思います。

2011年7月27日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録